

大阪府の露地ナスにおける天敵利用

金子修治

地独 大阪府立環境農林水産総合研究所

大阪府の露地栽培ナスにおいて最も防除に苦慮している害虫はミナミキイロアザミウマである。本種は多くの薬剤に対して抵抗性を発達させており、最近は無効薬剤が非常に少ない状況が続いている。このため、天敵を基幹とした IPM 体系の確立と普及が急務である。大阪府におけるアザミウマ類の有力な土着天敵はヒメハナカメムシ類である。しかし、露地ナス定植後の5月上旬から6月上旬にかけてはヒメハナカメムシ類の発生が少なく、年次や場所による発生量のばらつきも大きいため、安定した密度抑制効果を得ることは難しい。このような状況のなか、平成27年に天敵製剤「スワルスキー（スワルスキーカブリダニ）」が、ナス（露地栽培）のアザミウマ類を対象に農薬登録された。このため、当研究所では、5～6月は「スワルスキー」を利用し、その後の7～8月は土着のヒメハナカメムシ類を有効活用して、アザミウマ類を長期にわたり低密度に維持することを目標に試験研究を進めている。また、ヒメハナカメムシ類に対して、代替餌としてアルテミア耐久卵を、温存植物としてスカエボラを用いて、その発生を維持・増強する効果についても検討している。今回、現地および研究所内の圃場で実施した試験の結果を紹介する。

また、アブラムシ類についても、5～6月は土着天敵の発生が不安定であるため、天敵製剤の使用が望まれる。当研究所では、農食事業「飛ばないナミテントウの施設利用を促進し露地利用へと拡張する代替餌システムの開発」（平成28～30年）において、露地栽培ナスにおける「飛ばないナミテントウ」を利用したアブラムシ密度抑制技術の確立に取り組んでいる。具体的には、「飛ばないナミテントウ」成虫の放飼によるアブラムシ密度抑制効果の評価に加えて、代替餌としてアルテミア耐久卵と温存植物としてスカエボラを用いた「飛ばないナミテントウ」の定着促進・長期維持およびアブラムシ密度抑制効果の向上を検討している。今回、研究所内の圃場で実施した試験の結果についても紹介する。

Utilization of Natural Enemies in Eggplant Fields in Osaka Prefecture.

Shuji Kaneko

Research Institute of Environment, Agriculture and Fisheries, Osaka Prefecture